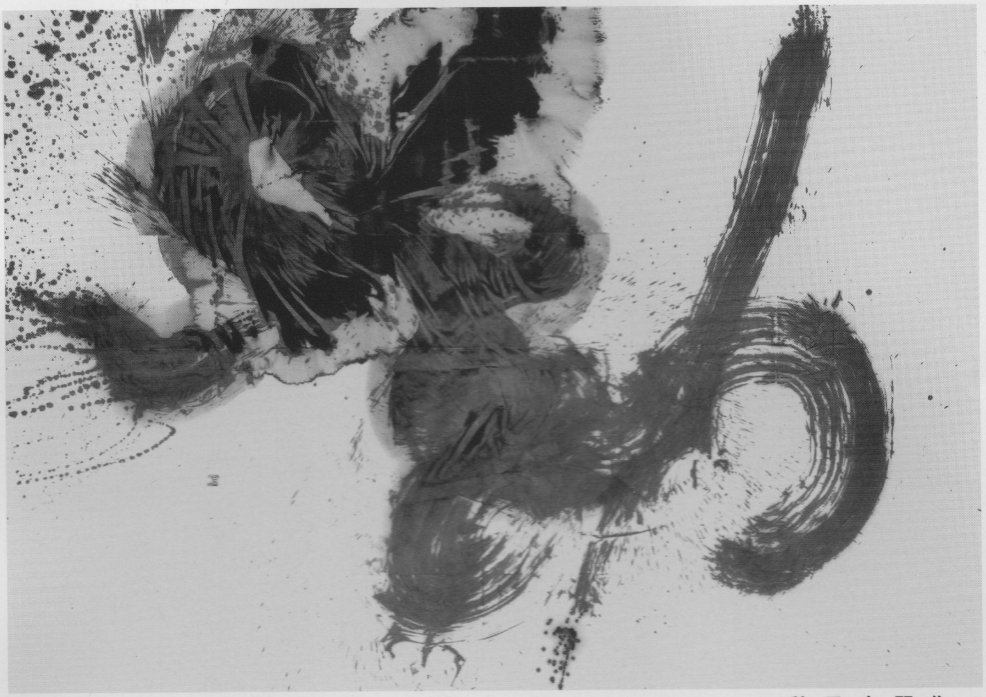


動　　秋元央嗣作

僕らの書展２０１４

青木　伸一

２０１０年、２０１２年に栃木県総合文化センターで開催された「僕らの書展」。今度は東京でやりたいとの思いを込めた、三回目の「僕らの書展２０１４」が、２０１４年８月28日(木)～31日(日)まで、東京芸術劇場で盛大に開催された。

出品者は平成生まれの９名だ。現在、社会人や大学生として生活し、日々研鑽に励んでいる。東京学芸大学卒業１名、東京学芸大学在学中３名、大東文化大学在学中３名、静岡大学在学中１名、筑波大学在学中１名である。

展覧された大作、中、小品を含めて27点が並ぶ。私は８月30日に鑑に出かけたが、印象に残った作品を枚数の許す限り、紹介する。

佐藤達也「風」。縦３５８㎝×横５３８㎝の超大作である。筆の太さが、高校時代にラグビーマンだった彼の胴回りもあり、彼が筆管を持って広大な空間に筆を落とし、一気に力強く爽やかに筆を運んでいる。墨色、滲みの多彩な変化も極めて美しい。さらに空間の上辺の筆遣いの迫力のある動きと、下辺の息の長い渇線とのバランス、その韻きが圧倒的に秀麗な風趣を見せている。加えて空間の白の形が抜群に美しく、申し分のない出色の出来映えである。そして空間の上辺を切った筆捌きも絶妙に効いて、爽快な風が吹いている。

佐藤達也「ハジメ」。「ハジメ」は普通、「始」「初」の文字を当てる。それを「一」を「ハジメ」と読ませて、実に奥深い文言だ。

横位置の空間を２分割し、左半分は深支子（こきくちなし）色を配す。起筆は空間の外から出発し、悠揚と息長く、伸びやかに書いていく。その位置も完璧で卓越している。斜めに走る墨痕の軌跡が表現をより深くする。

風　　佐藤達也作

「初」の文字を当てる。それを「一」を「ハジメ」と読ませて、実に奥深い文言だ。

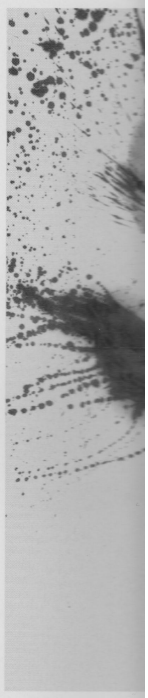
横位置の空間を2分割し、左半分は深支子（こきくちなし）色を配す。起筆は空間の外から出発し、悠揚と息長く、伸びやかに書いていく。その位置も完璧で卓越している。斜めに走る墨痕の軌跡が表現をより深くする。

秋元央嗣「動」。正気の張りつめた墨線が空間に動く豪快な動勢に迫力があり気宇雄大。淡墨表現の中の濃い墨色の対比が素晴らしく、淡い滲みの色も表現を深遠にし、最終画の斜めの線条も見事だ。黒白の対比も美しい。

秋元央嗣「北風と太陽」。イソップ寓話から、物事に対して厳罰で臨む態度と、寛容的に対応する態度の対比を、巧みに淡墨表現と朱墨による表現を対応させて、絶妙にこの寓意を表している。軽快な雰囲気がよい。

伊藤聡美「露」。墨気鋭く、「露」字の第一画の位置、墨色が極めて的確で、以下の筆の運びへの基準点になっている。空間を支配する感性が、より磨かれてきているといえようか。運筆の豊かなスピード感、独自のリズム、筆線に力がついてきている。滲み、潤渇の美しい韻きも心地よく、瞬（またた）くように輝いている。正に黒白一如の世界だ。とくに真ん中の囲まれた生きた白の形が真に卓抜である。

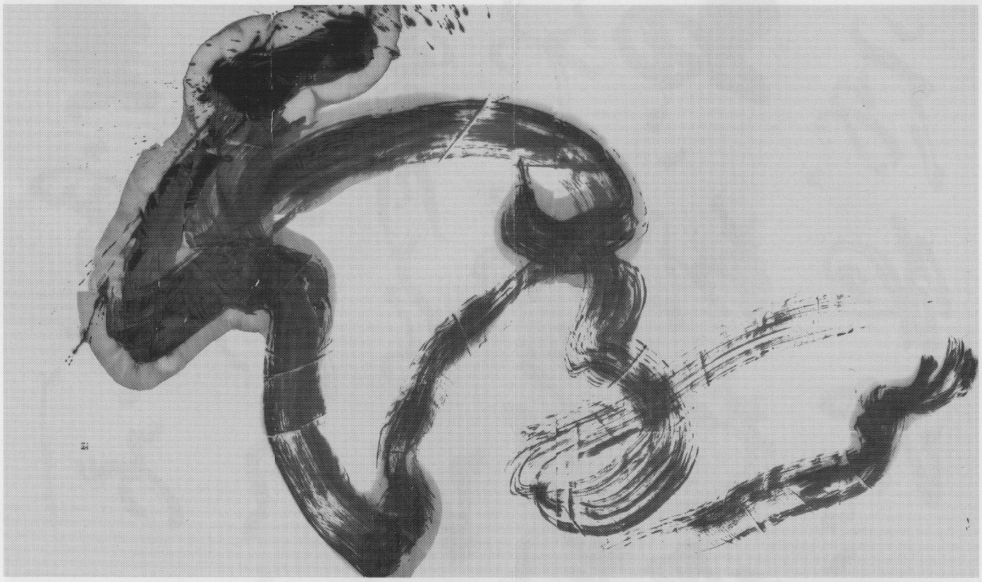
早川耀の「夜春」と題する七言絶句「春宵一刻直千金、花有清香有陰。歌管樓臺聲細々、鞦韆院落夜沈々」（蘇軾）。春の夜の静かで澄んだ詩の情趣を、淡墨で表現した行草作品。日頃素直に研究、研鑽を積んだ文字の姿態も端正で美しい。冒頭の「春」、五行目「細」「院」の深い筆致も効いて、空間全体の韻きも深く澄み、行の流れも自然で縦に通り、最後まで貫通する。緊密で隙のない見事な優れた作品である。



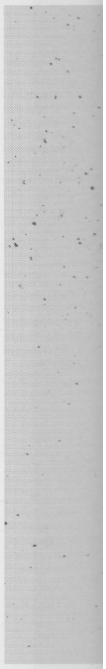
動

上辺の筆遣いの迫力のある動きと、下辺の息の長い渇線とのバランス、その韻きが圧倒的に秀麗な風趣を見せている。加えて空間の白の形が抜群に美しく、申し分のない出色の出来映えである。そして空間の上辺を切った筆捌きも絶妙に効いて、爽快な風が吹いている。

佐藤達也「ハジメ」。「ハジメ」は普通、「始」



露　　伊藤聡美作



風

端正で美しい。冒頭の「春」、五行目「細」「院」の深い筆致も効いて、空間全体の韻きも深く澄み、行の流れも自然で縦に通り、最後まで貫通する。緊密で隙のない見事な優れた作品である。

内野直弥「衣」。ふるさと栃木を流れる鬼怒(きぬ)(衣)川の、雄大な姿を表現。昔、絹村という所があり、よく絹を洗っていたところから、絹川と名が付き、鬼怒(衣)川となった。

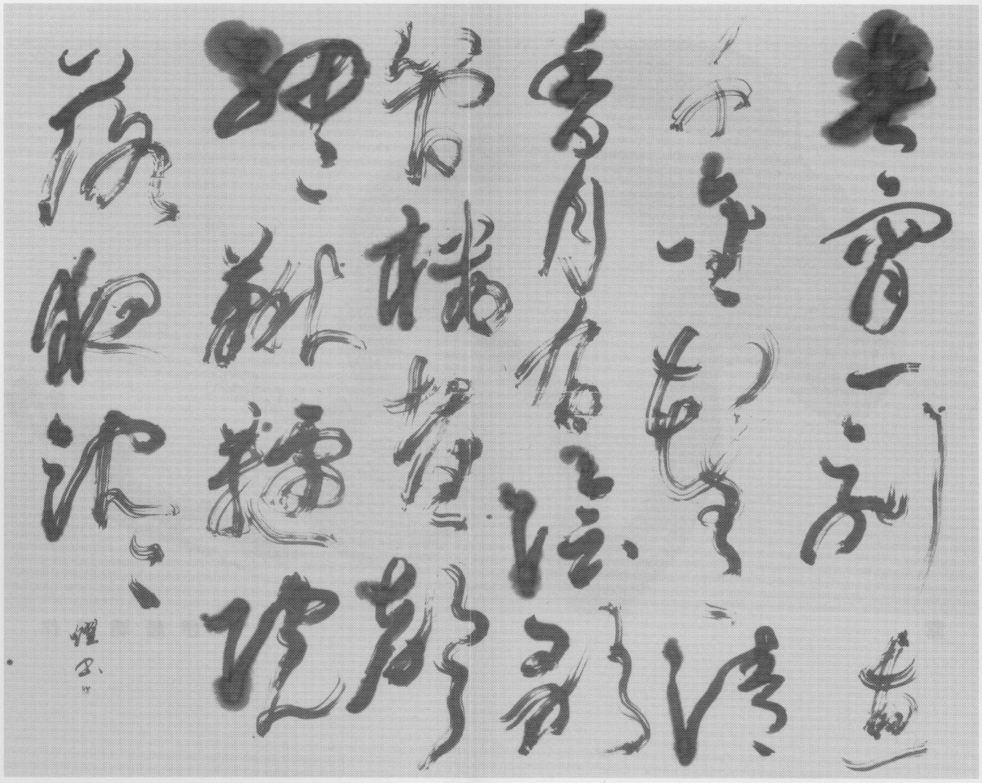
故郷の「暴(あば)れ川」である鬼怒川(衣川)を、縦長の空間に気分よく筆を運んでいる。その思い入れは凄く、線の動き、白との韻きが美しい、川の流れも実に壮麗だ。

長谷川結「さか」。モチーフは「坂」である。長谷川結のコメントは「一緒に登りませんか」とある。上に登るイメージだろうか。空間に対しての文字の点画の収まりが素晴らしく、鋭く厳しい眼が感じられる。変化する淡墨の色による線条に厚みがあり、立体的な表現だ。空間も隙はない。

長谷川結「つかむ」。白を造形する空間感覚が抜群。とにかく白黒の世界が限りなく美しいのだ。右上の点が絶妙に効いている。従って大きく開いた左の空間に思わず瞠目する。

泉諒治の高滴詩「塞上聞吹笛」と題する七言絶句「雪浄胡天牧馬還、月明羌笛戍樓閒。借問梅花何處落、風吹一夜滿關山」。高滴が辺塞の離情、故郷を思う気持を詠んだ漢詩を超濃墨を駆使して表現。肥痩、潤渇、掠れの差が大きく、起伏の激しいタッチが玄妙に詩情を盛り上げる。行頭の「雪」「月」「借」「風」の配置が秀逸で、これらに韻かせた「羌笛」「梅」「落」の表現が、激烈な行草の流れを巧みに引き締めて、見事である。

泉諒治「挑」。これは一字の作品である。大胆に引かれた線はどこをとっても立体的であり、迫力に富んでいる。しかも不動の安定感がある。殊にその線条の掉尾(とうび)は活力があり、生き生きと躍動している。やや右肩上がりの形態は意気高く、全体に少し脂ぎっていて、意気軒昂である。しなやかな筆遣いがよ



夜春　　早川　耀作

い。また、空間の中心に造形の視点があり、ために限りなく内に引き締まる求心力と、無限の広がりのある遠心力とが、強いバランスを保っている。そのため凛とした風光を放ち、しかも作品が大きく見える。

前田耕作「落」。作者のコメントは「大切な何かが崩れ落ちるさまを表現したい」。右肩上がりに書いた一字書作品である。「落」字の艹冠の二本の縦画の線に変化をつけて、余裕があり、自然体で運筆した優れた筆力はさすがである。その造形は柔らかく気宇壮大。自然なる無作の妙有がおのずから成す気品と貫録を見せている。見事な作品である。

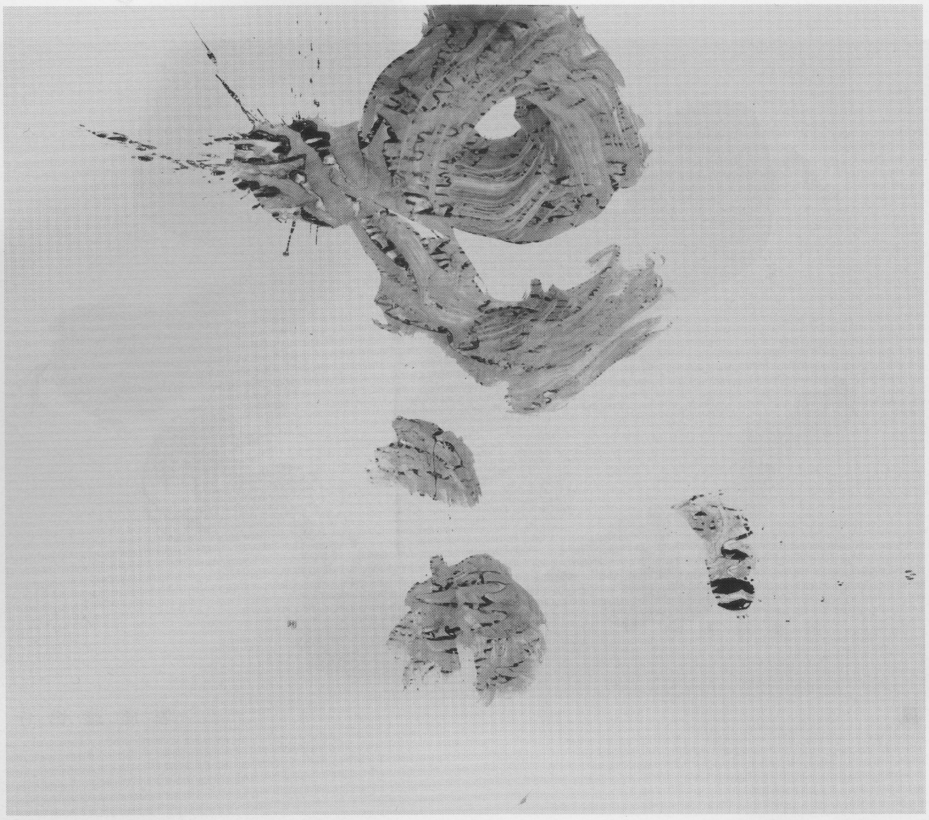
岡佑樹「残響」。演奏後の余韻、興奮の瞬間を表現したという。「残」字の起筆の位置が秀逸で、つづく筆の捌き、流れがスムーズに動いている。墨継ぎ後の「響」字は可能な限り簡素に書いて、二字の潤渇の韻きが美しい。また白の形が極めて美しく、空間全体の白が一つになって、正に輝いている。

平成生まれの若手グループ9名が、日々、書に明け暮れ、純粋に青春の全ての魂を込めて制作した珠玉の作品がまだまだある。その中から私の印象に残った作品を、更なる大きな期待を込めて、ここに追加・記載する。

前田耕作「臨論経書詩」。鄭道昭の詩を山東省雲峰山の巨石に刻した摩崖臨書作品。五言古詩48句を円筆と方筆を絶妙に駆使し、筆致は伸びやかで自由さがあり、整然としている。また隷書の風味を兼ね備えた、スケールの大きい楷書を臨書した素晴らしい一作。

佐藤達也「汚れっちまった悲しみに　今日も小雪の降りかかる…」（詩集〈山羊の歌〉より・中原中也）。「汚れっちまった悲しみに」と中原中也の倦怠感に満ちた詩に、佐藤達也は邂逅し、中也の世界を追いかけてみた現代文である。16行に書いて、湯疲れしたような倦うさを玄妙に表現する。行間の白と行との間が圧倒的な美しい世界で、天空から小雪が降り注ぎ、風が吹き、まるで怖気づき、汚れきった奥深い宇宙感を表現している。

直弥作



さか　　長谷川　結作

文である。16行に書いて、湯疲れしたような倦うさを玄妙に表現する。行間の白と行との間が圧倒的な美しい世界で、天空から小雪が降り注ぎ、風が吹き、まるで怖気づき、汚れきった奥深い宇宙感を表現している。

伊藤聡美「想」。面影を追って、美しい淡墨で書いている。清らかに澄んで透き通った墨色が抜群に秀麗で、極めて薄い滲みも簡潔で、空間の白との相性が実に巧みである。第一画の横画の位置から最終の単純化された「心」まで、みごとなリズムである。右下の空間も隙はなく、空間の黒白は一つになっている。伊藤聡美は確実に進化している。

岡佑樹「妙」。一見平凡な「妙」字は、清く澄んで超俗この上ない、まことに無欲恬淡、てらいや高ぶりなどは微塵もない。清楚にして独自のリズム、風韻を醸し出している。筆端の活機に見るごとく、小手先の筆遣いではない。それも根源的ないのちのはたらきゆえ、軽妙極まりない。真にリズミカルな、活きた優れた表現である。

衣　　内野直弥作

挑　　泉　諒治作

落　　前田耕作作

挑